



一般社団法人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会
第32回学術集会を終えて -関係の全ての皆様に感謝申し上げます-

学会長 三輪 富士代

(福岡市立こども病院
看護部長/小児看護専門看護師)

晴天にめぐまれた2022年7月9日(土)・10日(日)に、福岡国際会議場にて、「日本小児看護学会第32回学術集会」を3年ぶりに現地開催、その後8月31日(水)まで、オンデマンド配信を行いました。現地には両日で延べ1,484名、最終的に1,616名(会員912名、非会員594名、学生110名)もの多くの方にご参加いただきました。COVID-19感染による影響は長期に及び、7月はまさに第7波の始まりと行動制限緩和の動きがありました。その中で医療関係者であることなど諸般の事情を考慮してご参加いただきました皆さまに、心より御礼申し上げます。

小児看護に携わる私たちにはこどもにとっての“最善”を尽くす責務がありますが、それはたやすいことではなく、何ができるのかを改めて考えたいと思い、本学術集会のメインテーマを「今、目の前のこの子にできること～こどもの尊厳、生活、未来を守る小児看護実践～」といたしました。

本集会の特別講演では、Hope&Wish公益社団法人「難病の子どもとその家族へ夢を」代表理事の大住力先生、太宰府天満宮顧問の味酒安則先生、教育講演では、久留米大学医学部小児科学講座の山下裕史朗先生、厚生労働省子ども家庭局母子保健課の内田愛子先生にご講演いただきました。医療や制度、また歴史や文化的背景を含めた様々な側面からお話いただき、「こどもの成長・発達と生活を守り支える“ことについてお伺いできました。シンポジウム1の「看護師さん、ねえ、見て、聞いて～日々の実践で子どもの権利を守ること～」では、三好祐也先生、平田美佳先生、井上絵未先生、笹月桃子先生にご登壇いただき、日々の実践でこどもの権利を守り“声なき声”を聴く大切さをお話いただきました。「九州・沖縄小児看護教育研究会」とジョイント開催のシンポジウム2「小児看護の基礎教育・臨床教育について語ろう～子どもと家族の反応と行動の意味を考えることと実践をつなぐ～」では、原朱美先生、松本祐佳里先生、浦部由紀先生、佐野千枝子先生から、基礎と臨床での具体的な教育方法について伺いました。

一般演題の「口演」は76演題、「示説」は79演題、「テーマセッション」は21企画と幅広い内容でセッションが展開され、中でも、「医療的ケア児支援法」が成立して1年となる今、在宅や保育園などでの看護の現状・課題が多く取り上げられていました。また今回は、実践力向上を目指し「小児救急看護認定看護師会」「新生児集中ケア認定看護師会九州ブロック」「認定・専門看護師有志」の皆様の協力を得て、「急変対応」「新生児のポジショニング」「ルート類の固定」について指定企画「スキルアップセミナー」も開催しました。共催セミナーは5枠あり、そのうち3枠はランチョンセミナーとして博多のお弁当を楽しみながら新しい知見を学ぶ場となりました。

さらに、認定NPO法人「難病のこども支援全国ネットワーク」のご協力で、10の「患者・家族の会」の皆様にも現地に来ていただきました。

参加者のアンケートでは「プログラムが充実していた」「現地で直接ディスカッションができた」というご意見を多数いただきました。施設や領域をこえた仲間に会い、顔を合わせ多くの議論を交わせることに学術集会を現地で開催する意義の大きさを感じました。また、オンデマンド配信は、移動時間や勤務への影響を最小限にでき、プログラムを期間中いつでも繰り返し視聴できるメリットがありました。しかしながら、配信準備のために演者の皆様にご負担をおかけしましたことやプログラム全てが配信とならなかったなどの課題もありました。本集会ではオンデマンド開催決定とお知らせが遅くなり、そのために多くの皆様にご迷惑をおかけいたしましたこと、ご寛容賜りたくこの場を借りてお詫び申し上げます。

本集会は学生時代にご指導いただいた添田啓子前大会長からバトンを受けました。この1年半は、ただただ開催することだけに必死でしたが、小児看護を大切に育ててこられた諸先輩のご尽力があつて今があること、皆さまのご支援があつてはじめて学術集会ができることを実感しました。現地開催前後には恩師の片田範子先生、名誉会員の蝦名美智子先生、草場ヒフミ先生、梶山祥子先生、成嶋澄子先生、吉武香代子先生に励ましと「開催をありがとう」とお言葉をいただきました。ご支援いただいた方全てのお名前をあげることができずとても残念ですが、本集会は学会理事長・理事・監事はじめ、企画委員25名、実行委員62名、学生ボランティア122名、関係の多くの皆様のお力添えで開催できました。本集会に関わる全ての皆様に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、こどもへの看護がさらに良いものになるよう、そして、第33回学術集会の盛会を祈って、次期大会長の荒木暁子先生にバトンをお渡ししたいと思います。



スキルアップセミナー：新生児のポジショニング



企画委員・実行委員と



2022年度会員集会 2022年7月9日福岡にて



新理事会メンバー 一同 (2021年より)



蝦名 美智子様



草場 ヒフミ様



名誉会員証授与

研究奨励賞受賞者より

● 岩手保健医療大学看護学部 下野 純平

この度は日本小児看護学会研究奨励賞を授与していただき、誠にありがとうございます。

今回、受賞の対象となった論文「脳性麻痺発症のリスクが高い早産児の父親が親役割を遂行できるように支援する看護職の行動指標の作成と妥当性の検討—父親役割遂行に向けた両親での調整過程に着目して—」は、脳性麻痺発症のリスクが高い早産児の父親の親役割遂行に向け、両親での調整過程を支援するNICU看護師の行動指標を作成し、その内容的妥当性を明らかにした研究です。本指標は、父親役割に着目しつつ、父親役割遂行に向けた調整過程にかかわる家族全体を視野に入れ、縦断的に看護援助を展開するものとなっており、本指標を使用することで、家族システムとしての発達を支援し、NICU退院後の脳性麻痺発症により生じる危機を家族全体で乗り越えることに寄与すると考えます。

また、受賞の対象となった論文は、千葉大学大学院博士論文の一部です。NICUで勤務している際に、早産児の父親で、親役割遂行に悩んでいる方の看護援助について研究したいと考え、博士後期課程に進学してから論文掲載まで約5年半かかりました。この論文の基となる研究に取り組んでいく中で、研究に取り組む姿勢、研究を積み重ねる必要性、研究を公表する大切さ等を学ぶことができました。今回受賞の対象と

なった論文を投稿する際には、作成した指標を臨床で使用してもらえるような形での掲載を目指したいと考え、投稿先や論文構成に悩みましたが、これまでずっと投稿を続けてきた日本小児看護学会誌に、自分の希望する形で論文を掲載していただけた際は本当にうれしかったです。さらに、このような賞を頂戴できるなんて思ってもいませんでした。本当にありがとうございます。

現在、私は岩手保健医療大学看護学部に教員として所属し、小児看護学の教育・研究に携われる喜びを感じる一方で、自身の未熟さを日々実感しております。先日は、日本小児看護学会第32回学術集会に参加させていただき、「小児看護や研究について、もっと勉強しなければ」という思いも抱きました。この賞を糧に、これからも精進してまいります。

最後になりましたが、本研究にご協力くださいました皆様、千葉大学大学院でご指導くださいました中村伸枝先生、佐藤奈保先生、当時の上司であり大学院での学びをあたたく見守ってくださった前田和子先生、市原真穂先生に感謝申し上げます。

この度は本当にありがとうございました。



「小児プライマリケア領域の看護を広げよう～特定認定看護師の活動と展望～」の報告

学術集会において「小児プライマリケア領域の看護を広げよう～特定認定看護師の活動と展望～」と題して、テーマセッションを実施しました。このセッションの背景には、日本看護協会の認定看護師制度の再構築により、小児領域では「小児救急看護」から「小児プライマリケア」へ新たな認定看護師教育課程へ変更したことがあります。新たな教育課程のカリキュラムには特定行為研修が含まれています。さらに小児プライマリケアでは、医療的ケア児への看護や地域を含めたケア調整の科目などが新たに加わり、救急場面のみならず、病棟・外来、在宅や教育・福祉施設など多様な場で専門性をもって、熟練した技術で子どもの安全で健やかな育ちを支える認定看護師が期待されています。2021年に済生会横浜市東部病院で開講し、現在2期生の教育が行われています。

今回のテーマセッションでは、「小児プライマリケア」という幅広い枠組みで、小児分野ではまだ活用が限定されている看護師の特定行為を含めて認定看護師がどのように活躍するか、子どもたちが安心して育まれる地域を形成するために医療機関や教育・福祉施設で働く看護師がどのように協働していけるかを検討することを目的としました。話題提供は、小児プライマリケア認定看護師教育課程を修了した1期生からの報告、特定行為研修を終えた小児救急看護認定看護師の活動について行いました。修了生からは、現場に戻り、これまでは気づかなかった視点から子どもや家族へ介入したり、地域での生活を見据えた多職種連携をするなど、視野の広がりを実感していることが報告されました。小児プライマリケアという幅広さからもその役割の模索は続いているのですが、修了生それぞれが自施設と地域の特性からニーズを把握し、それらを踏まえた実践ができることが強みだと感じていました。特定行為研修を修了した小児救急看護認定看護師からは、外来から病棟、また地域へと継続した看護をタイムリーに実践するために、特定行為を活かしながら認定看護師としての活動について、事例を交えて報告されました。特定行為はその行為をすることではなく、行為に至るまでのアセスメント、実施後の評価という一連の流れが看護に組み込ま

れていることが重要とされています。認定看護師として看護を可視化する能力や医師を含めた多職種と連携する能力が発揮されることで、特定行為がより活かされることを報告から感じました。

会場には約50名がご参加いただき、その関心の高さをうかがい知ることができました。3年ぶりの対面によるオープンディスカッションは、多くの質問や意見によって大変有意義な時間となりました。特定行為に関する具体的な質問や、地域で働く看護師や他職種を支援する支援者支援の必要性、教育福祉施設で働く看護師の自律性に関することなど幅広い内容が議論され、求められる小児プライマリケア領域の看護を多角的に検討することができました。実施後のアンケートでは、小児プライマリケア認定看護師の活動のイメージが持てたこと、スペシャルニーズのある子どもと家族への地域における予防的支援や医療が届きにくい地域での活躍への期待など、プライマリケア領域における潜在的な健康・社会課題への役割があることが示されました。これからも小児プライマリケア領域の看護をみなさまとともに広げ、それぞれの地域で暮らす様々な子どもたちを支える支援者が増えていくことを目指していきたいと改めて思いました。



川出富貴子国際発表助成について

● 学術・研究推進委員会 二宮 啓子

本学会名誉会員の川出富貴子先生から2015年度に100万円のご寄付を頂き、2016年度に川出富貴子国際発表助成を開始しました。本年度で7年目を迎えました。

川出富貴子国際発表助成は、わが国における小児看護の現状・成果を広く世界に発信し、世界の小児看護の実践者・教育者との交流により、小児看護の発展を図ることを目的にしています。国際学術集会で研究発表を行うためには、高額に参加費に加え、渡航費用が必要になります。渡航費用は大学や病院から支給できない場合が多いです。そのため、川出富貴子国際発表助成により国際学術集会での発表がしやすくなりました。

これまでに、5つの研究が本助成制度を利用して国際学術集会で成果発表を行い、世界各国の小児看護の実践者・教育者との交流を通じて得た知見を国内に広めることができました。しかし、2020年以降COVID-19感染拡大の影響により調査研究の実施が難しいことに加えて、感染防止のため国際学術集會自体が中止になったり、Web開催になったりして、渡航費用を必要としない状況が続いていました。そのため、2020年度、2021年度は採択者がいませんでした。2022年度は少しずつ現地開催の国際学術集會が増えつつあります。そこで、川出富貴子国際発表助成の申請者を増やすために、2022年度は日本小児看護学会ホームページでの広報に加え、現地開催された日本小児看護学会第32回学術集會で、学術・研究推進委員会のパネル展示により第7回(2022年度)川出富貴子国際発表助成についてのお知らせをするとともに、チラシを配布しました。

現在、第7回(2022年度)川出富貴子国際発表助成の応募者を募集しています。

この発表助成では、子どもたちの健康増進に寄与するための小児看護の実践・教育に関する調査・研究であれば研究のテーマ、発

表形態(口演、示説)、学術集會の開催方式(現地開催、Web開催等)は問いません。国際学術集會であれば国内で開催されるものも対象になります。代表者および共同研究者は本年度の会費を納入していること、過去2年間に本学会の国際発表助成や研究助成を受けていないこと、2023年3月末までに国際学術會議で研究の成果発表を行うことが応募の条件です。助成金応募の時点で演題採択が決定していなくても構いませんが、国際学術集會発表後の申請は受け付けることができません。また、応募した助成申請が必ずしも採択されるとは限らないことにご留意ください。

応募締め切りは第1期:4月末(2022年度は終了しています)、第2期:11月末の年2回で、年間4件程度を助成します。なお、1件あたり10万円の助成金は航空券、国内交通費、宿泊料、予防注射料、査証手数料、空港旅客サービス施設使用料及び入出国税、国際学術會議参加費への充当が可能であり、2023年3月末までに助成金を使用する必要があります。また、助成を受けた発表者には助成金交付終了後2年以内に、日本小児看護学会学術集會の国際交流委員会ブースにおいて国際学会研究発表報告を行っていただきます。

川出富貴子国際発表の原資全てを使用した後はこの助成は終了となります。本学会のホームページ(<https://jschn.or.jp/>)で要領とQ&Aをご確認ください。ご不明な点はいつでも学術・研究推進委員会(academic@jschn.or.jp)にお問い合わせください。

多くの会員に助成を受けていただきやすいよう、昨年度から応募方法を郵送ではなく、学会ホームページからダウンロードし必要事項を記入した申請書をメール添付で学術・研究推進委員会にお送り頂ければ応募できるように変更しています。奮ってご応募ください。皆様のご応募をこころよりお待ちしております。

2023年度災害支援事業助成公募受付中 ● 災害対策委員会 野間口 千香穂

日本小児看護学会では、2020年度より災害支援事業の助成を行っています。本助成は、「国内で災害が発生した際に子どもとその家族を対象とした中長期的な看護実践活動（調査・研究を除く）を支援するための事業を行う。本事業は、本学会会員が行う被災した子どもたちに対する看護活動を支援することによって、わが国における子どもたちの健康増進を図ることを目的とする（実施要綱より）」と定めています。本助成は前身である震災支援事業の助成を引き継ぐかたちで始まりました。これは、本学会の災害対策委員会が発足するきっかけとなった東日本大震災の際に皆様にお寄せいただいた災害支援金で被災地の子どもたちへの中・長期的な支援の活動を助成するもので、2012年度から2019年度までの間、合計10件（総額1,116,803円）の災害支援事業が採択され、助成金を交付いたしました。これらの事業は学会ホームページの災害関連情報のページで確認することができます。

東日本大震災後も国内では地震や豪雨などの自然災害が続き、COVID-19パンデミックが起り、人々の生命や生活を脅かす災害が頻繁に起こる中で、子どもと家族のための災害支援事業を助成することは学会の重要な役割であると考え、現在に至っています。

現行の災害支援事業の助成では、2020年度に2件、2021年度と2022年度にそれぞれ1件の事業に助成金を交付しています。新たに本助成を始めるにあたって、本学会では対象となる災害について、「災害とは地震や豪雨、噴火等の自然現象または大規模な火災や爆発その他の原因によって人命や社会生活に対する広範囲な被害が生じる

現象」としました。対象とする活動は、(1)被災地に対する直接・間接的看護活動、(2)災害看護活動に有益な情報の発信および広報活動、(3)その他、理事会が認めた活動としています。現在、助成を行っている事業4件には、COVID-19に関連する災害支援事業もあります。また支援の方法も教育、情報発信、体制構築、とさまざまです。2023年度には2年間の助成期間を終えて、最初に交付した事業における支援活動の内容や成果を報告することができると思います。

現在、2023年度（第4回）災害支援事業の助成の公募を行っています。

ぜひ、会員の皆様の活動にお役立てください。助成内容・期間、応募締切等は次のとおりです。詳しくは学会ホームページ内の各種助成、災害支援事業の助成のページをご覧ください。皆様の応募をお待ちしています。

助成内容 : 1件20万円を上限として2件
助成金交付 : 2023年4月 **対象期間** : 交付より2年間
応募締切日 : 2022年12月7日（水）必着
問い合わせ先 : disaster@jschn.or.jp
(JSCHN災害対策委員会事務局)

●災害対策委員会

委員長：野間口 千香穂

委員：松浦和代、近藤美和子、西田みゆき、伊藤久美、
上原章江、鎌田佳奈美、祖父江育子、草野淳子、荒武亜紀

成人患者と混合病棟における子どもの療養環境向上のための 具体的対策（提言）について

● 小児看護政策委員会 荒木 暁子

急激な少子高齢化、医療構造の変化や在院日数の短縮に伴い、小児病棟の閉鎖・縮小、成人患者との混合病棟化は増加の一途をたどっています。コロナ禍と相まって、小児の入院する病棟においても面会制限、プレイルーム、玩具や絵本などの使用制限など、子どもたちの療養環境が様々な制約を受けています。

このような小児療養環境の質担保を懸念し、「成人患者との混合病棟における子どもの療養環境向上のための具体的対策（提言）」をまとめました。

この提言策定に関しての小児看護政策委員会の活動についてご報告いたします。

前小児看護政策委員会（委員長：及川郁子）より、混合病棟の課題について議論を重ねてまいりました。日本小児看護学会第31回学術集会では、テーマセッション「成人との混合病棟における子どもの療養環境向上のための具体的対策」（提言）についての意見交換をオンラインで行い、約50名の参加がありました。テーマセッションの終了後アンケート4件、メルマガで周知し14件のアンケート回答がありました。提言へ含むべき内容として、家族への支援、小児科経験者（ジェネラリスト）の病棟配置、リスクマネジメントの視点、成人患者への配慮、その他、看護管理者の理解や診療報酬での評価などのご意見をいただきました。これらを反映し、提言案を修正しました。

2022年3月7日付でホームページに提言をアップしⁱ、3月中旬に会員に提言とポスターを発送しました。

2022年度は、第53回日本看護学会（札幌、幕張）交流集会や第26回日本看護管理学会（福岡）インフォメーション・エクスチェンジでの周

知・情報交換活動を進めています。参加者からは「提言には概ね賛同できる」というご意見と同時に、小児看護を経験していない看護師にも分かりやすい内容であり看護管理者・スタッフにもっと周知する必要がある、混合病棟では母親に任せきりである、子どもの看護に自信が持てない、など多くの発言がありました。一方、混合病棟においても、小児看護の魅力を伝え自覚できるようにしていきたい、小児科病棟が担うべき役割を考え地域の重症児などを受け入れているなどの工夫もうかがうことができました。

第9回成育医療等協議会（令和4年9月21日）では、成育医療等基本方針の見直し案に「小児医療等の体制」として、以下のような文言が入り議論されています。

小児及びその家族の安心安全な療養環境の確保を図る観点から、小児科区域の特定などの対応を講ずることが望ましい中、医療機関の実情を踏まえた適切な体制の整備を推進する。ⁱⁱ

この提言が子どもの医療・看護にかかわるより多くの人々の目に触れ、子どもの療養環境を守る一助となるよう周知活動をしつつ、子どもの療養環境改善・質向上へ向け、学会としての活動を考え取り組んでいきます。

- i 一般社団法人日本小児看護学会成人患者との混合病棟における子どもの療養環境向上のための具体的対策（提言）：
https://jschn.or.jp/files/2022_sejinkanjyatkongoubyou.pdf（2022年10月12日アクセス）
- ii 厚生労働省、第9回成育医療等協議会資料3-2成育医療等基本方針の見直し案 p19
<https://www.mhlw.go.jp/content/11908000/000992372.pdf>（2022年10月12日アクセス）



【報告】倫理委員会企画研修会「小児看護の現場での倫理的なモヤモヤ、一緒に考えてみませんか～第2弾～」を開催しました。

●委員長 三輪 富士代

委員 石浦 光世、坂田 友、品川 陽子、高谷 恭子、松岡 真里、松本 貴子

小児医療は日進月歩で高度化し、出生前診断、積極的治療の判断や意思決定など医学の進歩とともに考えていかななくてはならない課題が多くあります。しかしながら、倫理的課題は“いのち”にかかわる重大事象だけに存在するものではなく、日常場面での何か“モヤモヤ”することに多く潜んでいます。私たち看護職者が、倫理的感受性を高め子どもにとっての最善は何かを考え実践できるよう、まずは、その現場で話し合っていくことが大切だと考えています。そして、COVID-19の影響により医療者同士の話す機会が減っているからこそ、「語りあうことのできる場」が必要ではないかと考えました。

そこで、倫理委員会では、2022年2月27日(日)に、日本小児看護学会第31回学術集会で行ったテーマセッション19「小児看護の現場での倫理的なモヤモヤ、一緒に考えてみませんか?」に続く、第2弾オンライン研修を開催しました。これは、第1弾のオンライン研修参加数とオンデマンド配信視聴数が非常に多かったことから、このような学びの場が大切だと考えたためです。

研修目的として「小児看護の日常的な実践場面での倫理的課題に気づき、それぞれが自施設での課題に目を向けることができる」ことをかけ、特に声に出し話し合ってもらふこと、課題に気づくことを主眼にしました。

参加者は、病院、教育機関、訪問看護ステーションなどで勤務する46名で、小児看護経験は、1年から30年と幅広い年数でした。プログラムは、まず、参加者の皆様に日常場面での“モヤモヤ”を想起してもらうために、委員より「日常的に起こり得る倫理的配慮を要する看護の場面6事例」を紹介しました。次に、自施設で感じている“モヤモヤ”や工夫していることなど、自由に出し合い共有してもらいました。

そこでは、ファシリテーターとして19名の小児看護専門看護師に協力してもらいました。その後、グループで話し合われた内容を全体で共有し、最後に、委員長より、まとめと「小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針」の活用方法を説明しました。

話し合いでは、「子どもの気持ちではなく、治療や時間的制約を優先している環境」や、「コロナ禍になり、これまで以上に制限がある中で、どこまで何ができるか」「プライバシーの確保・配慮が足りない」などの様々な“モヤモヤ”が出され、立場や職種をこえた活発な意見交換の場となったと感じました。アンケートの「オンライン上のグループワークは話しやすかったですか」という質問では、若干名(2名、4%)が「あまりそう思わない」という回答でしたが、「倫理的課題を検討することができましたか」「参加しての気づきはありましたか」という質問には、全員が「とてもそう思う」「思う」と回答されていました。研修会については、「事例を捉える視点や考え方、解決に向けた話し合いの工夫など気づきを得た」「実際に活用できる学びとなった」「子どもの意見に耳を傾けることの重要性に改めて気づいた」「子ども自身に選択してもらう機会を持つようにしたい」などの意見を多く頂きました。今回の研修でも、小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に気づき、それぞれが自施設での課題に目を向けることができたのではないかと感じられ、委員会の私達も、改めて学ぶことが多くありました。

参加者から、今後もこのような研修を望む声も聞かれています。今冬も小児看護における倫理的課題に関する研修会を計画しておりますので、是非ご参加いただけたら幸いです。

これからも、学会員の皆様とともに子どもの権利を擁護できるように倫理委員会の活動を続けていきたいと考えております。

事例紹介の一部

このようなモヤモヤ、感じたことはありませんか?

口数が少ないようくんが、初めて病気の辛さを打ち明けてくれ、やっと心を開いてくれたと思い、とても嬉しかった。その後「看護師さん、LINE教えて。その方が話しやすいから」と言われ、少しでも力になりたいと思いLINE交換した。それからほぼ毎日、何通もLINEが届き、新人の私では対応に困ることも増えてきたけれど、誰にも相談できない...

あきとくんね、中学生になってから随分体調が落ち着いて、学校にも毎日通えるようになってきて、この前、初めて校外学習に参加できて、海に行ったよ。主治医からは「楽しんでおいで」と言われてすごくうれしかった。でもね、担任が学校看護師に相談したら「体調第一」と言われて、海に足をつけることもさせてもらえなかった...全然楽しなかった...なんて普通のことかさせてもらえないんだらうって、なんか辛かったよ。

長期に在宅酸素療法をしているあきとくんの母親

「日常的に起こり得る倫理的配慮を要する看護の場面6事例」より一部抜粋

まとめの一部

日々、日常のケアの中で、少しだけ考えてみませんか?
(もちろん、私、私達も、です)

- ✓ 今、話しているのは、誰のことでしょうか?
- ✓ 今、話していることの、主語は誰でしょうか?
- ✓ 今、話していることは何のためでしょうか?





「リレートーク」

●野間口 千香穂さん（宮崎大学）



自己紹介

鹿児島県の霧島連山の麓に生まれ、小学校入学まで離島に暮らし、その後中学卒業まで父の仕事の関係で数回の転校を経験しました。高校卒業後、千葉大学で魅力的な先生たちのもと看護を学び、小児看護と出会い、神奈川県内の病院に就職、その後東京都内の短大で小児看護学を教えることになりました。やがて行き詰まり聖路加看護大学大学院に進学、刺激的な先生方や仲間たちと看護を深めました。そして縁あって現在の大学に着任、九州に戻りました。こちらには九州・沖縄小児看護教育研究会があり、そこで出会った先生方に助けられながらこの地で20年になろうとしています。最近の私の課題と言えば、もっぱらタイムマネジメントです。

看護師になったきっかけ

高校時代から早く自立することを考えていて、人の役に立ちたいとか日本の医療のために力を尽くしたい、などという大それた考えは全くなく、看護師だった母の姿から職業として身近に感じていたことが主な理由です。進学先を考えている私に高校の部活の顧問が言った「これからは看護師になるにも大卒だ!」の一言で、大学進学と看護師を目指すことを決めました。

新人時代の思い出

北里大学病院の学童病棟(当時)で新人看護師時代を過ごしました。私が就職した時代、私立の大学病院の平均在職年数3年余りだったのでしょうか。思い起こしてみるといつまでが新人だったのか…。初めての夜勤は就職した年の4月の下旬でした。頻繁にナースコールを押して看護師を呼ぶお子さんがいて、私は夜勤リーダーからしばらくその子のそばにるように言われました。緊急入院でその日初めて会ったのですが、個室にいて、慢性疾患で幼少期から入院退院を繰り返しているなんと難しい子、という印象だったこともあり、どうふるまっていかわからず、寝たり起きたりを繰り返すそのお子さんにしゃべりかけてみたり、からだをさすってみたり…。私がそばにい

るのにナースコールを押されたらどうしようと思いながら、その子が寝入るまでの間なんとかベッドサイドにいました。今になって考えてみると新人の私が動かない方が先輩達には好都合だったのかもしれませんが。

小児看護の魅力

何より、子どもたちの「生き抜くちから」と「発達するちから」を感じることができることです。「今」を生きる子どもたちといると自分も頑張ろうと思います。病棟看護師をしている頃、術後の創に離開があり毎日創洗浄をしているお子さんがいました。苦痛が強く処置の時はいつも泣いていました。数日続けて処置の介助を担当した私は、嫌がる本人の準備につきあったり、励ましたり。私も必死な感じになっていたのでしょうか、ある日、処置が終わりほっとしてしばらく一緒に処置台に座っていると、「ほく、明日頑張ってみよう」と言って処置室を出ていきました。こういう瞬間に、「ああ、ちからをもらっているのは自分の方だ」と励まされて、小児看護を続けてきました。

ストレス解消法

最近の気分転換は雑貨を眺めること、早朝に近所の田畑の道を散歩すること(たまに農業ハウスから音楽が聞こえてきます)。細かい手作業が好きで最近は刺繍にはまっています。ただ、今の私が刺繍をするには拡大鏡が必要です。

後輩たちに期待すること

これからの子どもたちは私たちが経験したことのない子ども時代を過ごすことになると思います。医療の提供のあり方や小児看護の現場もどんどん変化することでしょう。他の分野の人との交流もますます大切になってくると思います。多様な仲間と語り合い、好奇心を持ち続け、しなやかであってほしいと思います。

ボタンを受けて欲しい人  (大学時代ともに学び遊んだ) 佐野 美香さん

ウクライナ侵攻への声明発出とユニセフ「ウクライナ緊急募金」への募金について

会員の皆様には日頃より学会の運営にご理解とご協力を賜りまして衷心よりお礼を申し上げます。

本年3月に、本学会はロシアのウクライナ侵攻に際して声明を発出し、ウクライナの子どもたちを支援するために募金を行いました。以下にその経緯を報告いたします。

2022年2月24日に、ロシアがウクライナでの軍事作戦を開始すると公表した後に、ウクライナへの軍事攻撃が始まり、世界中の人々が先行きの見えない戦争に強い不安を感じました。戦争の犠牲になるのはいつでも弱者であり、私たちが最大限の努力のもとに大切にしてきた子どもの生活や命が、奪われ脅かされる事態となりました。会員の皆様も憤りと悲しみを感じていることと思います。

この状況で私たちができることはなにかと考えていたところ、3月2日10時過ぎに荒木理事から「学会から声明などを出しますか」と連絡をいただきました。他の看護系学会の動きを待たず、すぐに声明を出すことにし、声明の骨子を当日昼までに決めて声明文の第一案ができたのは翌日の昼過ぎでした。すぐに学会役員で協議し声明文を学会ホームページで発出したのは3月4日でした。英文声明は3月8日に追加しています(<https://jschn.or.jp/pr/778/>)。

その後3月20日に開催した理事会では、脅威にさらされているウクライナの子どもたちへの支援策として、ユニセフの「ウクライナ緊急募金」に100万円を募金することを決め、3月23日に評議員のご意見をうかがったうえで、学会の総意として募金を最終決定しました。3月25日には募金を完了しました(<https://jschn.or.jp/pr/787/>)。

人類はその歴史のなかで戦いを繰り返してきました。また、その歴史を振り返ることによって、戦わず争わず共に生きる術を培ってきてい

るはずですが、それにもかかわらず地球上から争いがなくなることは、残念ながら今は実現できていません。戦いの最中もその後も後悔の念を抱くにもかかわらずです。これが無念でなりません。これからも人類は進化していくのだと思いますが、まっさきに戦争のない世界を実現しなければならないと思います。

私たちがよく知る、大人たちが子どもたちのために作った「子どもの権利条約」は、「命を守られ成長できること」「子どもにとって最もよいこと」「意見を表明し参加できること」「差別のないこと」(https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html)を原則としています。この約束を私たちは決して破ってはならないのです。

この原稿を執筆する際に、「子どもの権利条約」をあらためて読み直しましたが、さらに、ある方から絵本を紹介していただき読みました。その絵本は「へいわとせんそう」(たにがわ しゅんたろう/ぶん、Noritake/え、ブロンズ新社/刊、2019年3月/発行、<https://www.bronze.co.jp/books/post-176/>)です。「へいわ」と「せんそう」で何が異なり、何が同じかが示されています。ウクライナの子どもたちも泣いていますが、ロシアの子どもたちも同じく泣いているのです。

一刻も早くこの戦争が終わることを願わずにはおれません。

● 一般社団法人日本小児看護学会
理事長 塩飽 仁

広報委員会メンバー

● 委員長：渡邊 輝子 ● 委員：筒井 真優美、西垣 佳織、新家 一輝(第60号編集長)、鈴木 千琴、杉澤 亜紀子